

「兄弟」党・国家認識と建国初期の中国外交 —中国の駐ベトナム民主共和国大使着任をめぐって—

服部隆行

はじめに

中華人民共和国（以下、中国と略記）の外交に関する研究については、日本国内においても現在まで幾らかの研究蓄積がある分野である（例えば、宇野重明（1981）、喜田昭治郎（1992）、岡部達味（2002）、青山瑠妙（2007）など）。米中、中ソ、日中関係史、あるいは東アジアへの冷戦の浸透という側面からの分析をも加えれば、中国外交史の研究は更に幾らか充実しているとも言えよう（例えば、山極晃（1997）、石井明（1990, 2001）、毛里和子（1989, 2006）、下斗米伸夫（2004）など）。特に近年、中国外交部の「档案」の公開は、それを利用した研究成果の発表を経て、外交史研究に一層大きな進展をもたらせる可能性がある（川島真、2009）。

しかしながら、そうした動向と前後して、比較的早くから成果が公開されてきたのは、建国初期の中国外交に関する研究である。こうしたなかで、これまで見出された建国初期の中国外交の一特質とは、当時の中国が「国際主義」に象徴される対外政策を通じて、共産主義者の国際的連帯を強化して、「理想」的な国際環境の構築を求めていたという側面であった。

周知のように、第2次世界大戦後の国際環境は、ソ連の「一国社会主义」の体勢から社会主义建設を目指す複数の国家をうみ出した。それにより社会主义国による国際関係が構築されることはごく当然のなりゆきであった（菊井禮次、1971, p. 13）。そしてこれらの関係性が内的に構築される過程において、それぞれが社会主义政党として、従来育んできた「兄弟」党としての関係や、それぞれが政権を担い社会主义国として存立したときには、「兄弟」国家という相互認識を土台とし、これらが「国際主義」という対外政策を通じて有機的な結びつきを生み、ひとつの社会主义陣営を成り立ってきたのである。

ところで、既に述べたように、建国初期の中国においても「国際主義」は対外政策の重要な方式のひとつであり、中国は「兄弟」党・国家においてそれによる紐帶を重視していた。中国の「国際主義」の特質については、岡部達味（1975, 2002）、石井明（2003）などが、深い考察と分析が与えている。岡部は、まずマルクスやレーニンから始まる「国際主義」を丁寧に分析した上で、それを、社会主义国間の利害の一致を前提とした安全保障上の施

策と捉えた。また石井はソ連という社会主义の強力なリーダーに従う国際的な義務としてこれを捉えた。

しかしながら、これまでの全般的な議論においては、「国際主義」という術語に対して必ずしも明瞭な解答を与えていたとは言いたい。その理由のひとつには、ハンガリー動乱以来、ソ連を中心とする社会主义陣営内の変動が「国際主義」のあり方にも動搖をきたしたため、その解釈が一様なものとはならなくなつたことも影響している。

他方で、筆者はこの「国際主義」という術語に対する解釈に一定の定義を見出せない背景には、同時代的なショジェーエフ（1966）や菊井禮次の先駆的研究は存在するものの、その後は社会主义国間の国際関係においてその土台となった「兄弟」という関係性に、あまり多くの分析・検討を与えてこなかったことにもその原因があるのではないかと考える。一体、これら社会主义国間の国際関係のなかでは、「兄弟」という相互認識にどのような解釈を付与してきたのであろうか。あるいは、建国初期の中国はこれについてどのような認識をもっていたのであろうか。

まず本論では、この議論に入る前提として以下の点に留意したい。第1に、「兄弟」という文言の基底となる認識には「親密」、「親しみがある」状態がそのベースとして存在しているということである。この点にはそれほど異論はなかろう。次いで問題はこうした「兄弟」の関係性は、水平的に、垂直的に、あるいはこれらが複雑に交錯してそれを形成する点にある。すなわち、「兄弟」という関係性には実に多様な認識をうむことが可能であり、その意味で社会主义国間の国際関係上、この「兄弟」という関係性は不規則な変数として理解しうるのである。

こうした土台となる「兄弟」の関係性の多様な認識は、その関係性を構築する「国際主義」にも一定の影響を与えた。すなわち、社会主义国間の関係を繋ぐ「国際主義」が明確な定義を持たない、いわば「フリーハンド」のような対外政策として位置づけることを可能にしたのである。そして、あとで詳細に分析・検討するように、中国は建国初期において、ベトナム民主共和国（以下、ベトナムと略記）への「国際主義」による対外政策のなかに、自らの戦略上の利益を確保する方策を見出していたのである。

そこで、本論では、まず、「兄弟」党・国家の関係性をめぐる歴史的な変遷について考察しつつ、次いで、建国初期中国の「兄弟」党・国家の認識について、検討する。そして最後に中国の駐ベトナム大使着任問題の考察を通じて、建国初期の中国が重視していた「兄弟」という関係性と、それを基底とした「国際主義」という対外政策がそのようなものであつたかについて、一定の理解を導き出していきたい。

I 「兄弟」党・国家の関係性をめぐる歴史的変遷

本章では、菊井禮次（1971, pp. 9-33）の論考をもとに、「兄弟」党・国家の関係がどの

ように生成されてきたのかを、その歴史的な変遷にさかのぼってまとめておきたい。

「兄弟」党・国家という関係性が生まれた源泉は、マルクスやエンゲルスによる「諸国民の団結」というテーゼから見ることができる。彼らは19世紀前半における民族間対立を捉えて、「諸国民の団結」には利益の共通性が必要だと説いた。そしてこのことは、かの『共産党宣言』にも敷衍し、こうした団結が諸国家の対立関係の解消にもつながることが指摘された。こうした流れのなかで、1864年に第1インターナショナルが設立され、この組織が「諸国民の団結」を促すための交流の場となった。

第1インターナショナルのような組織は、新しい国際社会のあり方を模索した、ひとつの試みであった。それは各国における労働者階級という下部的な社会経済構造を土台とした団結を通じて、新しい国際関係を生み出そうとした試みでもあった。しかしながら、レーニンは、こうした「諸国民の団結」の結果、新しい国際社会の誕生が、理想的な社会主義による国際社会の成立に直線的に結びつかないことを指摘していた。その上でそういった国際社会の実現には、民族的抑圧の完全な解消のための徹底的な民主主義の実践を通じた、諸民族間の平等、自決権や主権の尊重などが必要であると説いた。

このようにマルクス、エンゲルス以来、「兄弟」党・国家の関係性を生成するまでの言説は、将来の社会主義国による国際社会の到来を念頭になされていたことがわかる。しかしながら、事実上、1921年に成立したモンゴル人民共和国を除き、1922年にソビエト社会主義共和国連邦として、ソ連が単一連邦を形成していくことなどにより、社会主義国間の国際関係は形成されず、ソ連による「一国社会主義」の状態が第2次大戦後まで続くことになった。そして、戦後、社会主義を目指す諸国家の出現により、社会主義国間の国際関係のあり方が、その当事国を中心に本格的に議論され、その理論化の過程で、「兄弟」党・国家の関係性についても一定の共通認識が見出されることになる。

複数の社会主義国による国際関係のあり方について、理論化の試みが行われるのは1950年代の半ばのことである。この理論化のなかで、これらの国家間において、社会経済制度上の同質性を基盤に、平等、互恵、主権・領土保全の相互尊重、内政不干渉などを通じて、あらゆる敵対関係が消滅することが見出された。岡倉古志郎は、この国際関係のもととなる緊密な社会経済的な結びつきを『兄弟的な相互援助関係』と称した（岡倉、1956, p. 113による）。

ここに社会主義国間の国際関係における「兄弟」という紐帶の理論化が意識的に行われ始めたのであったが、こうした紐帶については、既に理論化が意識し始められた当初から、疑問視する考えも存在していた¹⁾。そしてこの具体的な反証は、社会主義陣営が、1956年

1) 菊井禮次は、批判が我が国では「マルクス主義理論家」から岡倉古志郎の所論を通じてなされていたことを指摘し、その論者のひとりとして前芝確三を名を挙げている。また、ソ連においても、ハンガリー事件以降、こうした国際関係に「一定の誤りと困難が存在していた」事実を認めたとしている（菊井禮次, pp. 16-19）。

10月のハンガリー事件、1960年代に本格化する中ソ対立やルーマニア批判などに遭遇することにより、これらの単純な「兄弟」のつながりを見直す作業としてなされたのである。

更に、1968年にチェコ事件が起こると、いわゆる「ブレジネフ・ドクトリン」が示すように、個々の「兄弟」に存する利益以上に、社会主义陣営全体の利益の優位性が説かれるようになった。こうして、1950年代半ばまでに模索された「兄弟」の関係性を基底とした国際関係のあり方は大きな変容を迎えることになる（木戸蘗、1982, pp. 232-247）。

以上のように、社会主义国間における「兄弟」党・国家という紐帶を意識した国際関係は、理論化の模索がなされたものの、主として1960年代以降の社会主义陣営内での様々な動搖を通じて、その関係性は未熟さを露呈するものになった。ただし、こうした出来事があっても、基本的に「兄弟」という紐帶が取り扱われたわけではなく、中ソ対立の激化とチェコ事件を通じて、ソ連を「社会帝国主義」と規定した中国を除き、社会主义の崩壊が始まる1980年代末まで、彼らの国際関係はかろうじて維持されていたのである（毛里和子、1990, p.5, 高山英男、1990, pp.39-41）。

他方で、「兄弟」党・国家という関係性における定義の不確定さは、それぞれがそれぞれに対する「兄弟」党・国家という解釈を同一のものとせず、それを基盤としてなされる「国際主義」にも影響を与えた。すなわち、「国際主義」は「兄弟」党・国家のなかに介在して、それらによる対外政策に作為性や自律性をもつことを可能にしたのである。そこで以下、各章で、建国初期の中国の「兄弟」党・国家認識を通じた対外政策のあり方を見ることがある。

II 建国初期中国の「兄弟」党・国家認識

本章では、建国初期中国の「兄弟」党・国家認識について、便宜的に、ソ連、東欧諸国（いわゆる「人民民主主義国」）、アジア諸国の事例に分けて、考察を加えていきたい。なお、分析の対象は1950年末までに中国との国交が成立した諸国に限定した。また、中国の「兄弟」党・国家認識を史料上において補完するため、『人民日報』の記事内容のデータからこれらの文言の検索し、それらを使用している記事タイトルを1とし、年別の使用頻度を割り出し、これを別表とした。こちらも併せて参照されたい。

まず、ソ連に対する「兄弟」党・国家認識についてである。管見の限り、ソ連に対して、「兄弟」という文言の使用例を見ると、中国指導者がソ連政府や国民に対する、外交儀礼上の挨拶時に使用するケースが多い。例えば、1949年10月5日、劉少奇は、中ソ友好協会総会の成立大会での挨拶で、これまでの中ソ関係について「兄弟のような相互の友愛」が存在してきたこと、更に今後の中ソ関係の発展に関しては、「兄弟のような友好と合作の増進」を求めていた。また、毛澤東は、同年12月16日にソ連を訪問した際、モスクワ駅で、ソ連人民・政府に対して「兄弟のような友誼」を指摘していた（中共中央文献研究室ほか編、

2005a, p. 82, 中共中央文献研究室編, p. 189)。

だが, 毛沢東は1949年12月21日に開かれた, スターリンの70歳の誕生を祝う会での祝辞において, スターリンに「中国人民の導師」という文言を使用している(中共中央文献研究室編, p. 195)。このことからして, 中国は, 中ソ両共産党あるいは, 両国の「兄弟」という関係において, それが有する水平的な関係性以上に, 垂直的な関係性をより意識していたようである。

このことは, 劉少奇がソ連を訪問する際に準備した, 1949年7月4日付けの「書面報告」からも窺える。このなかの「ソ中関係に関する問題」という項目では, 中ソ両党の間で「論争が発生した」ときの対処法として, 劉少奇は「我々の意見を説明した後, ソ連の決定に服従する準備をし, 握るぎなく執行する」と述べていた。これについて, スターリンは, こうした「服従」は「今までなかったことであり, 許されない」という見解を述べていた。

しかし, こうした見解がスターリンから出されたことに対して, 毛沢東は次のように弁明していた。それはスターリンの見解のように, 中ソ両党間において, 中国がソ連に「服従」するような関係性は, 「処遇や態度」面においては, 「如何なる文章上の決議や記録」などに残すべきではないが, 「服従」する姿勢は, 「共産主義運動の発展に利することになる」ということであった(中共中央文献研究室ほか編, 2005a, p. 17, pp. 21-22, p. 34)。

このことからも分かるように, 少なくとも中国党のソ連党に対する「兄弟」という認識には垂直的な関係性を意識していたことが窺える。だが他方で, ソ連側は中国党の「服従」を批判していることからして, そうした認識が中国側の一方的なものであった可能性もある²⁾。なお, 中ソ両党間において「如何なる文章上の決議や記録」に「服従」を意味する文言を残してはならないという認識を共有していたことが、それを導いたかどうかは必ずしも判然としないが, 後述するように, 建国初期の中国と東欧, アジア各国間における双方の大使着任時の外交儀礼上の挨拶には「兄弟」という文言が多く見られるものの, 中国とソ連の双方の大使着任時の挨拶には, こうした文言が見受けられないことも, 併せて指摘しておきたい(廉正保ほか主編, 2006, pp. 29-30, pp. 44-45)。

次いで東欧諸国である。中国党と東欧諸国の共産党や労働党系の政党との間で, 「兄弟」

2) 中国指導層のロシア語の通訳をしていた師哲は自身のメモワールの中で, 面白いエピソードを挙げている。1950年7月27日に, スターリンがモスクワ訪問中の劉少奇ら代表団を自らの別荘に招いて, 宴会を催した際, 彼が, 中国のこれまでの多くの経験をソ連も学ぶべきだと主張し, 乾杯をしようとしたところ, 劉少奇は「兄はいつでも兄であり, 弟はやはり弟である, 私たちは永遠に兄に学ぶ」と述べ, その乾杯を受けつけず, これに対してスターリンは, 「弟が兄を追いかけてはいけないとでも言うのだろうか」として反論したが, それでもなお, 劉少奇はその乾杯を受け付けなかった, というエピソードである。師哲はこの出来事を「双方は心理上の差異と習慣の違い, あるいは人情, 風俗上の隔たりのせいか, このように互いに理解しあえない特殊な局面がかもし出された」と懐述している(師哲ほか・劉俊南訳ほか, 1995, pp. 253-254)。

という文言を相互に使用していたかどうかについては、史料の制約上、不明である。一方、既述の大使の着任時の挨拶を、1950年内に双方の大使が着任した東欧諸国を分析対象として見てみると、少し面白い現象が浮かび上がる。それは、中国、東欧諸国双方とも、着任する大使側から「兄弟」という文言を含んだ挨拶をするケースが多いのだが、それを典礼上の同一場面で必ずしも使用していないケースもあるからである。

例えば、チェコスロバキアやポーランドとの間では大使交換時において、両国とも着任する大使側から「兄弟」という文言を含んだ挨拶をするのに対し、接受国側はその返礼において使用していない（同上、pp. 134-135, 152-153, 160-162, 168-169）。

しかし、1950年9月8日、駐ブルガリア大使の曹祥仁は着任の際、「兄弟」の文言を用いて挨拶をし、ブルガリア側もそれを用いて返礼を行っているが、ブルガリアの駐華大使の着任挨拶、中国側の返礼ではいずれもその文言を使用していない。また同年8月11日、駐ルーマニア大使の王幼平は同国での着任時の挨拶では「兄弟」という文言を用いているが、返礼をしたルーマニア側ではそれを用いていない。これに対し、同年3月10日にとりおこなわれていたルーマニアの駐華大使の着任挨拶、それへの毛沢東の返礼では、両者とも「兄弟」という文言を使用していないのである（同上、pp. 53-55, 64-65, 73-75, 81-83）。

史料上の制約もあるが、ここに挙げていない他の事例も含めて、管見の限り、中国側から「兄弟」という文言を使用した挨拶が多く、中国が意識的にこの文言を使用していた可能性がある。ただし、東欧諸国側が「兄弟」という文言の使用を意識的に避けているかどうかは必ずしも判然としない。しかしながら、中国が「兄弟」という文言を通じて、東欧諸国に対し、水平的あるいは、垂直的であるかの如何を問わず、「親しみ」を込めた関係性の構築を模索していたことに疑いはなかろう。

最後に、アジア諸国である。同じように1950年内に双方の大使が着任した事例を見てみよう。

まず、中国より先に建国し、社会主義国への道に進んだ、朝鮮民主主義人民共和国（以下、北朝鮮と略記）やモンゴル人民共和国（以下、モンゴルと略記）との相互の大使着任時の挨拶、それへの両国の返礼では、前者は、その詳細については後述するが、北朝鮮の駐華大使李周淵の着任時には、着任挨拶、それへの中国側の返礼を含めて「兄弟」という文言の使用がないにもかかわらず、駐北朝鮮大使倪志亮の着任時には、両国ともその文言を用いている（同上、pp. 99-100、劉金質ほか主編、1994、p. 25、世界知識出版社編、1957、pp. 57-59）。

後者については、モンゴルの駐華大使の着任時の挨拶、それへの中国側の返礼には、「兄弟」という文言は現れていない。しかしながら、1950年7月10日、駐モンゴル大使吉雅泰は着任挨拶で「兄弟」という文言を使用している。ただし、モンゴル側の返礼でこの文言を用いていたのかどうかは不明である（廉正保ほか主編、p. 184、世界知識社編、

pp. 51-53)。

少し面白いのは、イギリス領から独立したビルマ（ミャンマー）の駐華大使が着任時の挨拶では「兄弟」という文言を使用していないにもかかわらず、返礼をした毛沢東は「中国とビルマ両国は、国境が連なり、歴史・文化において密接な関係があつただけでなく、両国人民には更に兄弟のような深く・厚い友誼が存在していた」と述べていることである（中共中央文献研究室編、p. 462）。なお、駐ビルマ大使の姚仲明の着任時、それへのビルマ側からの返礼の際には両者とも「兄弟」という文言を使用していない（廉正保ほか主編、pp. 376-377）。このようにアジア諸国に対しても、やはり中国側から意識的に「兄弟」という文言を使用していたように見える。

ところで、以上のアジア諸国の動向と大きく異なるのは、中国とベトナムとの「兄弟」という文言の使用をめぐる情況である。それはベトナム側が、機会あるごとに「兄弟」という文言を使用して、中国との「親密」な関係性の構築を求めているからである。

例えば、1949年12月5日、ホー・チ・ミンは、中華人民共和国の建国を祝して、「ベトナムと中国の2つの民族は数千年の歴史において兄弟の関係を有してきた」とのメッセージを中国へ送っている（郭明ほか編、1986、p. 1）。尤も中国もこうしたベトナム側からのアピールに応えていないわけではない。しかし、当時、インドシナ戦争において苦境に立たされていたベトナムにとっては、中国から早急かつ、多くの軍事的支援を求めるためにも、「兄弟」という文言を用いて、より一層、中国との「親密」な関係性を強調したことには疑いはなかろう。

そうであるならば、中国が「兄弟」という関係性を対ベトナム政策で示すとき、すなわち、中国が「兄弟」という関係性を基底とした「国際主義」をベトナムに運用する際、彼らは「キャスティングボード」を握っていたということになり、「兄弟」という関係性を崩壊させない限りにおいて、「フリーハンド」な対ベトナム政策を可能にしたと見ることもできる。

では、次章では、中国の駐ベトナム大使着任をめぐる問題を通じて、ベトナムに対する「兄弟」という関係性が、中国の「国際主義」のなかにどのように現われ、そうした対外政策に如何に反映されているのかを見ることとする。

III 中国の駐ベトナム大使着任をめぐる問題

まず、中国とベトナムとの国交樹立までの過程を概観していきたい。

1949年秋以降、ホー・チ・ミンは中国に対し、インドシナ戦争でのベトナム側への支援と同時に、両国の国交樹立を打診した。同年12月下旬、中国は、「フランスが中国を承認する前に」ベトナムとの外交関係を樹立すること、羅貴波を「中国共産党中央委員会駐インドシナ連絡代表」（この名義は1950年1月上旬に決定。以下、中共中央と略記）としてベトナムに派遣することを決定した（中共中央文献研究室ほか編、2005a、p. 207）。

これ以降、中国、ベトナム両国の国交樹立の動きが加速することになる。1950年1月14日、ホー・チ・ミンは、世界各国に向か、ベトナム政府の承認と外交関係樹立を要請するアピールを行った（郭明ほか編、pp. 2-3）。『人民日報』はこの声明を1月18日に掲載した。

その間の15日、ベトナムは、中国政府の承認と、相互に大使の派遣することなどを柱とした外交関係の樹立を要請し、18日、中国はそれに応え、ベトナム政府を承認し、外交関係の樹立を発表した。『人民日報』はこのことを翌19日に紹介した（中共中央文献研究室編、pp. 238-239、廉正保ほか主編、pp. 242-261）。更に当時、中ソ友好同盟相互援助条約の締結のため、モスクワにいた毛沢東は2月1日、東側陣営にベトナム政府の承認と外交関係の樹立を促すために、中国、ベトナム両国の政府承認と外交関係の樹立が実現したことを、モスクワにある中国大使館から東側諸国の同大使館に通達したと、北京に伝えていた（中共中央文献研究室編、pp. 254）。このことは、その前日の1月31日にソ連がベトナム政府を承認したことと、2月初旬に、ホー・チ・ミンが秘密裏にモスクワに訪問することの段取りを中国が行っていたこととも関係が深かろう（拙著、2007、pp. 109-112）。

こうして、中国とベトナムとの間の外交関係の樹立が発表されたが、現実にこの外交関係を軌道に乗せるための大使の相互派遣の問題に関しては、後述するように、中国が慎重な構えをみせ、遅々として進まないこととなる。その発端は、1954年に正式に駐ベトナム大使に着任することになる羅貴波の既述の身分を対外的に非公開とすることを決定していたことにあった（中共中央文献研究室ほか編、2005a、p. 589）。

しかしながら、中国が羅貴波をベトナム大使として着任させるための努力を全くしていなかったわけではない。それは中国がインドシナ戦争中のベトナムを支援する上でも、両国間で貿易を活発化させる必要性を認識しており、そのためには、中国、ベトナムの間での相互の大使交換をそのひとつの前提条件と考えていたからである³⁾。

こうして1950年5月8日、中共中央は羅貴波に対し、ベトナム側の同意を前提に、駐ベトナム大使に任命することを通知し、更に6月7日には、以前から中国への帰国を求めていた羅貴波に対し、現地の大使館の設立までその延期を求めていた（同上、2005b、p. 147、210）。

このように既に中国では羅貴波が大使に就任することは内定していたのである。しかし

3) 1950年4月7日、華南外国貿易局は、中央人民政府貿易部に打電し、未だベトナムとの「外交関係が樹立されていない」ので、彼らとの貿易が促進できないと述べている。劉少奇はこの電報に関して、9日に、彼は陳雲や薄一波に対応するように指示を出しているが、華南外国貿易局のこの認識には触れていない。しかしながら、既に国交が成立しているながら、地方局がこのような認識をもっていたとするならば、特に中国が正式な大使を着任させていないことが、既にこのころから、貿易促進を通じたインドシナ戦争への支援という面において大きな問題となっていたという可能性がある（中共中央文献研究室編、2005b、p. 21）。

ながら、こうした動向は、以後大きな変化を遂げることになる。

1950年7月3日、既にベトナムの駐華大使に着任することが内定し、中国に滞在していたホアン・ヴァン・ホアン（黃文歛）は、劉少奇に対し、両国が大使の交換と、それを早期に同時発表することが、両国政府の間で決定していることを照会した。翌4日、劉少奇はホアン・ヴァン・ホアンと会談し、ベトナム側は駐華大使を公開発表し、中国側は駐ベトナム大使の公開を延期することで、この話し合いは決着をみたのであった（同上、pp. 266-267）。

しかし、7月7日、周恩来はホー・チ・ミンに打電し、「現在、ベトナムの戦局が発展しており、各国大使を迎える手段が乏しいのなら、暫時、各国使節を受け入れないほうが、あなたがたにとって有利である」（下線は筆者による）とし、羅貴波の大使着任を延期しただけでなく、ベトナム側にも早期の駐華大使の着任について再考を促したのである（中共中央文献研究室ほか、2008b, p. 12）。

この電報のなかの下線部は毛沢東が加筆した部分である。彼はベトナムに対し、他国の大使の受け入れ情況にまで言及して、再考を促している。このことは、ベトナムに対する内政干渉とも受け取られかねない行為と言えよう。ただし同時に、こうした毛沢東の判断が、当時の中国のベトナムに対する「国際主義」のあり方を示すひとつに加えられることであることはいうまでもない。

ところで、中国がベトナムに対し、このような政策の転換を行った背景には、1950年6月25日に朝鮮戦争が勃発したことが大きい。朝鮮戦争の勃発を機に、中国がベトナムに対する軍事支援のあり方などに大きな調整を加えていたことは、既に多くの論者が論証している（朱建栄、2004、石井明、1999、拙著）。駐ベトナム大使着任・公開の延期という対外戦略の転換もその一環としてなされたと考えられる。

しかし、周知のようにインドシナでは戦争が継続しており、ここにきて朝鮮半島でも戦争が勃発したのである。では、中国にとって同じく「兄弟」の関係性を基底とした「国際主義」の対象となる北朝鮮への対外政策はどのようなものであったのだろうか。中国がベトナムに対して行った対外政策の転換が、中国の戦略的な利益に即して行った「国際主義」であった事実をより鮮明にするために、中国と北朝鮮の相互の大使の着任情況を見ることで、簡単な比較を行ってみたい。

中国と北朝鮮の間では、1949年10月4日に北朝鮮が中国新政府を承認し、中国が6日に北朝鮮政府を承認したことで、国交を樹立し、両国の大使の交換が約束された。その後、1950年1月17日に、北朝鮮は李周淵を駐華大使に任命したと通知し、着任のための国書の手交は同月28日に行われた（廉正保ほか主編、pp.84-101）。

しかし、中国はこの時点で駐北朝鮮大使を派遣しておらず、1950年4月21日になって、中共中央は同東北局に、近く駐北朝鮮大使を発表すると通知していた。だが、朝鮮戦争の勃発まで具体的な動きはなかった。そして勃発後の6月30日になって、中国は柴軍武を

臨時代理大使に任命したのである（中共中央文献研究室ほか編，2008a，p.325，中共中央文献研究室編，1997，p.51）。

こうした臨時代理大使の任命は緊急の処置であり，これまで中国が北朝鮮に大使を派遣する積極的な意思をそれほど明確にもっていたとは言えないことを示すものとなろう。しかし，7月8日に，スターリンが駐華大使のローシチンに宛てた電報が中国に伝えられしたことにより，事態は大きな変化を遂げる。それはスターリンが中国に対し「できるだけ早く」北朝鮮に大使を置くことを求め，中国はそれに応じて，8月6日に，倪志亮を駐北朝鮮大使に任命したのである（沈志華編，2003，p.437，中共中央文献研究室ほか編，2008a，p.325-326）。

このようにベトナムと北朝鮮に対する大使の着任を通じた中国の対外政策は，朝鮮戦争の勃発を機に，その対応に違いを見せるものとなった。すなわち，中国は「兄弟」の関係性を有する両国に対して，対応の異なる「国際主義」を展開したのである。

さて，早期の大使の交換が実現できなかったベトナムは，以後も積極的に中国にその働きかけを行っていた。1950年9月初旬，インドシナ労働党総書記のチュオン・チン（長征）は中国に対し，インドシナ共産党中央委員会がホアン・ヴァン・ホアンを正式に「ベトナム民主共和国政府駐華代表」に任命したことを通達し，インドシナ労働党と中共との「兄弟党」の友誼を通じた関係強化を求めた。更に12月，ベトナムは，ホアン・ヴァン・ホアンをベトナムの駐華大使銜（級）代表とする決定を行い，1951年3月28日には，その正式な国書を発行していた（中共中央文献研究室ほか，2005b，p.529-530，廉正保ほか主編，pp.255-256）。

こうしたベトナム側の動向に中国も配慮しなかったわけではない。劉少奇は羅貴波に対し，将来，大使となることを前提に職務を遂行するように求めていたし，北京ではベトナムの外交代表団との緊密な接触を重ねていた（例えば，中央文献研究室ほか，2005b，p.361-362，錢江，1999，p.178など）。しかし，ホアン・ヴァン・ホアンが朱徳に，自身がベトナムの駐華大使銜代表であることを記した国書を手交した，前日の1951年4月27日，中国はベトナムに対し，羅貴波が事実上の駐ベトナム大使であることを認めた上で，なお「ベトナムではいまだ首都が定まっておらず，その他の国の外交使節もいない」ことを理由に，ふたたび，羅貴波が大使として着任することのみならず，事実上の大使であることを対外的に公開することをも延期すると伝えていた（中共中央文献研究室ほか，2005c，p.284）。

このように中国とベトナムの間における大使の交換はいびつな状態が続いた。結局，1952年9月に，ベトナムはホアン・ヴァン・ホアンを正式に駐華大使として任命したことを中国側に通達したものの，中国においては，羅貴波がホー・チ・ミンに国書を手交し，駐ベトナム大使として着任したのは，1954年9月のことであった（廉正保ほか主編，pp.250-251，260）。

むすびに代えて

以上見てきたように、社会主义国の間の国際関係においては、「兄弟」党・国家という関係性を極めて重視していた。そしてこのような関係性を基底とし、「国際主義」という対外政策を通じて、彼らの間の結びつきを強めていったのである。それは、菊井禮次が言うように、こうした指向による彼らの国際関係のありようは、資本主義諸国にはない『新しい型の国際関係』を目指すものであった（1971, p.13）。

他方で、「兄弟」党・国家という関係性の認識については、その意味的な根幹を形成する「親しみのある」という関係性を超えてその解釈を求めようとするとき、それはあまりに多義的であり、多様な解釈を包含していた。すなわち、水平的あるいは、垂直的といった二元的な解釈では、到底及ばない、複雑かつ曖昧模糊とした関係性であることを見出すことができる。

だが、実証のレベルにおいて、この「兄弟」という関係性に一定の解釈を付与することができるケースも存在していた。それは中国とソ連との関係性である。中国党はソ連党に「服従」することを主張し、毛沢東はスターリンを「中国人民の導師」として仰いだ。このことは中国がソ連を、その両国間の「兄弟」の関係性のなかに、「兄」あるいはそれ以上の認識をもち、垂直的な関係性を見出していくことを論証するものになろう。だが、既述のように、スターリンは中国の「服従」に否定的であった。また、当時の中ソ関係について、中華人民共和国の成立により、中国とソ連による「革命事業」の分業化が進んだとする論者もいる（例えば、下斗米伸夫, pp. 48-51）。従って、中ソ間の「兄弟」というあり方においても、必ずしも垂直的な関係性のみで捉えることも完全なものとは言えない。

ところで、このように「兄弟」という関係性が複雑かつ曖昧模糊としていただけに、それを基底とした「国際主義」という対外政策は、その政策自体の振幅のなかに一定の自由度を確保していた。

本稿でとりあげた大使着任問題で、中国はソ連の指示を受けたこともあり、北朝鮮にはいち早く大使を着任させた。その一方で、ベトナムに対しては、早期の大使交換を相互で確認しながら、中国は羅貴波を駐ベトナム大使として正式に着任させることと、その対外的公開を避けていた。インドシナ戦争中のベトナムにとって、その政府の承認に続き、大使の相互派遣を通じた中国との関係の強化はもっとも重大な外交課題であったはずである。ただし、それに応える中国の「国際主義」はその歩みを遅々としていた⁴⁾。

4) こうした情況を助長した背景には、中国がベトナムに対して政府間外交以上に、党外交を重視していたことも考えられる。既にベトナムを含めたアジア諸国との連携については、1950年2月に、中共中央統一戦線部の下部組織として、「東方各国革命問題研究会」が成立し、その後1951年1月24日には、この組織の事業を引き継ぐ形で、中共の外事部門として中共中央对外連絡部が成立していた。この機関の設立を促した劉少奇は、この組織にベトナムなどアジア各国との「兄弟」党との

尤も当時の駐ベトナム大使着任をめぐる中国の「国際主義」の実態は、彼らにとっては、その政策自体の振幅のなかに収まっていたものなのかもしれない。中国はインドシナ戦争中のベトナムを支援し続けてきたし、最大の支援国でもあった。当時、建国間もない段階での朝鮮戦争の勃発という国際環境の変動に接して、中国には様々な対外政策上の制約と限界が存在していた。従って、中国は駐ベトナム大使の着任問題をめぐっては躊躇したものの、その他のベトナムに対する「国際主義」は高水準なものを維持していたのかもしれない。

しかしながら、そうであっても中国が「国際主義」という対外政策に「フリーハンド」な要素を見出していたことも確かであろう。そこで中国が戦略上の利益の確保と、それに基づく一定の柔軟な政策実施が可能になったのは、中国が「国際主義」の基底となる「兄弟」という関係性に、明確かつ、鮮明な解釈が存在しないことを認識していたからかも知れない。そうであるならば、「兄弟」という関係性に多様な解釈が可能であることが、実態としての「国際主義」という対外政策に様々なあり方をうみ出していたと見ることができよう。

なお、本稿では社会主义国間の国際関係の構造上から見た、「兄弟」党・国家の関係性に着目し、検討と考察を進めてきた。しかしながら、アジア世界においては、中国を中心とした歴史的、伝統的な秩序体系から、「兄弟」という関係性を理解する必要性も当然生じてくるだろう。この点については、今後の課題としたい。

(はっとり たかゆき・愛知学院大学非常勤講師)

〈別表〉『人民日報』の記事に見られる「兄弟」国家・党という文言の使用頻度

【参考文献】

- 青山瑠妙（2007）,『現代中国の外交』慶應義塾大学出版会
石井明（1990）,『中ソ関係史の研究（1945－1950）』東京大学出版会
石井明（1999）,「朝鮮戦争から中ソ対立へ—国家統一・経済建設と革命支援の相克一」（権山紘一ほか編『岩波講座 世界歴史』26, 岩波書店）
石井明（2001）,「中ソ・CIS関係」（岡部達味編『中国をめぐる国際環境』岩波書店）
石井明（2003）,「中国におけるナショナリズムと国際主義—朝鮮戦争参戦の評価の変遷を中心に—」
（大津留（北川）智恵子ほか編『アメリカのナショナリズムと市民像—グローバル時代の視点から—』ミネルヴァ書房）
宇野重明（1981）,『中国と国際関係』晃洋書房

連係をはかり、国の行政機関である政務院（後の国務院）の外交部との協調を求めていた。だが一方で、羅貴波の回想では、以後この組織がベトナムに関する政策の実務を担い、劉少奇の手から徐々に離れていたことをとほのめかしている。こうした点から考えれば、この当時、ベトナムに対する政策は、党の機関で行うのか、あるいは政府行政機関が行うのか、微妙なせめぎ合いの時期にあつたのかもしれない（中共中央文献研究室編, 2005c, pp. 25-27, 羅貴波, 1988, pp. 241-242）。

- 岡倉古志郎 (1956), 『世界政治論』 日本評論社
- 岡部達味 (1975), 「中国外交の基本的性格」 (岡部達味『中国の対日政策』, 東京大学出版会)
- 岡部達味 (2002), 『中国の対外戦略』 東京大学出版会
- 郭明ほか編 (1986) 『現代中越関係資料選編』 上, 時事出版社
- 川島真 (2009), 「戦後国際環境と外交」 (飯島涉ほか編『シリーズ 20世紀中国史』3, 東京大学出版会)
- 菊井禮次 (1971), 『社会主義国際関係論序説』 法律文化社
- 喜田昭治郎 (1992), 『毛沢東の外交—中国と第三世界』 法律文化社
- 木戸翁 (1982), 『東欧の政治と国際関係』 有斐閣
- アイラペチャン・スホジェーエフ (1966), 『社会主義世界の国際関係』 (菊井禮次訳, 原著は 1964 年)
法律文化社
- 師哲ほか (1995), 『毛沢東側近回想録』 (劉俊南ほか訳, 原著は 1991) 新潮社
- 下斗米伸夫 (2004), 『アジア冷戦史』 中公新書
- 朱建栄 (2004), 『毛沢東の朝鮮戦争』 (原著は 1991 年) 岩波現代文庫
- 世界知識出版社編 (1957) 『中華人民共和国对外関係文件集 1949-1950』 知識出版社
- 錢江 (1999) 『秘密征戦』 上冊, 四川人民出版社
- 高山英男 (1990), 「社会主義国際関係論と中ソ対立」 『国際政治』 第 95 号
- 中共中央文献研究室編 (1987), 『建国以来毛沢東文稿』 第 1 冊, 中央文献出版社
- 中共中央文献研究室編 (1997) 『周恩来年譜 1949-1976』 上巻, 中央文献出版社
- 中共中央文献研究室ほか編 (2005a, b, c), 『建国以来劉少奇文稿』 第 1 冊, 第 2 冊, 第 3 冊, 中央文献出版社
- 中共中央文献研究室ほか編 (2008a, b) 『建国以来周恩来文稿』 第 2 冊, 第 3 冊 中央文献出版社
- 沈志華 (2003) 『朝鮮戦争: 俄国檔案館の解密文献』 上冊, 中央研究院近代史研究所
- 服部隆行 (2007), 『朝鮮戦争と中国—建国初期の中国の軍事戦略と安全保障問題の研究』 溪水社
- 毛里和子 (1989), 『中国とソ連』 岩波新書
- 毛里和子 (1990), 「序説 社会主義の変容と中ソ関係研究の新しい視角」 『国際政治』 第 95 号
- 毛里和子 (2006), 『日中関係』 岩波新書
- 山極晃 (1997), 『米中関係の歴史的展開 1941-1979』 研文出版
- 羅貴波 (1988) 「少奇同志派我出使越南」 (《緬懷劉少奇》 編輯組編『緬懷劉少奇』 中央文献出版社)
- 劉金質編 (1994), 『中国対朝鮮和韓国政策文献匯編: 1949-1994』 1 (1949-1952), 中国社会科学出版社
- 廉正保ほか主編 (2006 年), 『解密外交文献: 中華人民共和国建交檔案: 1949-1955』 中国画報出版社

① 「兄弟」国家

id	日時	タイトル
1	1947/02/23	南斯拉夫
2	1949/07/22	共同深切哀悼季米特洛夫 保共中央电谢联共中央
3	1949/08/05	青年代表团在国门
4	1949/08/24	加强内部团结和警惕 答告美帝好梦做不成 民主建国会平发言人痛斥白皮书
5	1949/08/25	我青年代表团在匈京 招待东南亚各国代表 介绍我青年对解放战争贡献 同是一个家庭的好弟兄 中国的胜利就是我们的胜利！东南亚各 ...
6	1949/08/28	坚强的中国学生队伍 必予美帝侵略以痛击 师大学生会斥白皮书
7	1949/09/11	出席世界工联代表李汇川 向铁路职工作报告 号召学习苏联经验提高人民铁路效能
8	1949/09/12	北大中共总支等五单位举行 中苏友好座谈大会 二千余人热烈讨论学习苏联陈绍禹同志出席作总结发言
9	1949/09/15	迎接亚澳职工、亚洲妇女代表会议 介绍学生斗争经验 市学联广征学运资料
10	1949/09/22	中国政协代表访问记 记工人旗帜赵占魁
11	1949/09/24	中国政治协商会议第一届全体会议 各单位代表主要发言
12	1949/10/04	苏联承认我国喜讯传出 京市人民大欢腾高呼斯大林万岁
13	1949/11/12	接受苏联友好援助 波经济迅速发展 波报赞扬苏波经济合作
14	1949/11/22	关于越南工会运动 越南代表团首席代表刘德福报告摘要
15	1949/11/24	政治经济学教程绪论 (3 4)
16	1949/12/17	拥护执行一九五〇年度全国财政收支概算
17	1950/01/03	投机商人赶快洗手！
18	1950/01/23	中国民主建国会拥护北京市军管会收回前美法荷等国 ...
19	1950/02/10	为完成并超过今年铁路建设计划而奋斗！—铁道部 ...
20	1950/02/16	喜庆中苏两国缔约 首都人民齐声欢呼
21	1950/02/17	用我们的行动来拥护中苏友好同盟互助条约
22	1950/02/17	国际主义的新标志、中苏友好的新里程碑
23	1950/02/23	关于苏联贷款给中国
24	1950/02/25	“马歇尔计划”给西欧人民带来了什么？
25	1950/02/28	文艺报十一期出版
26	1950/03/15	越外长赞扬中苏条约 这条约的缔结是保卫远东和平 ...
27	1950/03/24	越南文协中央执委会 电中苏等国文艺工作者致敬
28	1950/04/05	中苏三协定将加速我国工业化 首都人民热烈拥护 ...
29	1950/04/06	为中国工业化前途欢呼 全国拥护中苏三协定 感谢 ...
30	1950/04/23	走向社会主义的匈牙利 记“匈牙利人民共和国图片 ...
31	1950/05/15	中国保卫世界和平大会委员会主席郭沫若 在北京保 ...
32	1950/06/02	首都五千儿童代表集会 欢庆第一届国际儿童节 洋 ...
33	1950/06/15	沿着幸福的道路前进—记北京图书馆国际儿童图片展览
34	1950/06/21	民主建国会常委会召集人 黄炎培在大会上的发言
35	1950/07/03	由美帝国主义的侵略罪行说到和平宣言签名运动 中 ...
36	1950/07/08	首都各界妇女昨集会响应和平签名运动周 通过对美 ...
37	1950/07/19	朝鲜民主主义人民共和国国徽 (图片)
38	1950/07/22	人民波兰六年
39	1950/07/27	给美军一个更狼狈的下场！记人民解放军炮兵某部 ...
40	1950/08/14	为在全国争取两万万个和平签名者而奋斗
41	1950/08/16	我国驻朝鲜共和国特命全权大使 倪志亮向金科奉呈 ...
42	1950/08/17	把和平签名运动再扩大！再加强！
43	1950/08/18	柏林七十万青年伟大的和平进军
44	1950/08/19	祝贺朝鲜解放与抗美战争的胜利 中国人民代表团团 ...

年号	件数
1946	0
1947	1
1948	0
1949	15
1950	51
1951	48
1952	69
1953	95
1954	160
1955	183
1956	196
1957	338
1958	260
1959	393
合計	1809

45	1950/08/19	在平壤“八一五”大会上倪志亮李立三致祝辞
46	1950/09/05	中朝人民的战斗友谊万岁！—赴朝中国人民代表团 ...
47	1950/09/11	保加利亚人民欢庆解放六周年 苏、中、朝代表出席 ...
48	1950/09/17	三十个国家的青年代表同声欢呼朝鲜人民胜利
49	1950/09/17	朝鲜人民胜利的物质基础
50	1950/09/20	“世界知识”廿二卷十一期出版
51	1950/10/01	深值庆祝的国庆
52	1950/10/17	阿尔巴尼亚十日—阿尔巴尼亚通讯
53	1950/10/25	扑灭美帝国主义的侵略火焰！丁鼎、李延年两同志来信
54	1950/10/27	各地英雄模范发表书面意见 对美帝侵朝战争不能置 ...
55	1950/10/29	提高警惕，加强国防！
56	1950/11/04	首都职工注视我国边境安全 极端痛恨美帝扩大侵略 ...
57	1950/11/04	坚决抗美援朝保家卫国—本报各地读者来信
58	1950/11/04	关于文艺界展开抗美援朝宣传工作的号召—中华全 ...
59	1950/11/05	坚决抗美援朝保家卫国—本报各地读者来信
60	1950/11/05	来自深山草原上的愤怒
61	1950/11/06	保卫自己的好生意—访问首都工商业界
62	1950/11/08	上海烈士家属纷纷要求 向美帝讨还血债 以实际行 ...
63	1950/11/12	民盟北京市支部盟员联名 发表抗美援朝保家卫国宣言
64	1950/11/12	北京漫画工作者发表宣言 抗美援朝保家卫国
65	1950/12/11	俄文化部对外文化联络局举办 人民民主国家电影周 ...
66	1950/12/15	首都救济界人士发表声明 斥奥斯汀所谓“救济中国 ...
67	1950/12/25	人民民主国家电影周在京胜利闭幕

②「兄弟」党

id	日時	タイトル
1	1947/01/01	新年试谈副刊和群众结合
2	1947/02/16	捷克在前进中
3	1947/07/01	世界民主和平的保卫者—各国共产党概况
4	1947/11/02	欧洲九国共产党华沙会议上 日丹诺夫报告国际形势
5	1948/01/10	意共举行六代大会 托格里亚蒂痛骂美侵略
6	1948/03/25	三王村抓住群众迫切要求 整党民主形成高潮
7	1948/07/13	情报局关于南共的决议
8	1948/07/21	欧洲各国兄弟党电慰托格里亚蒂
9	1948/07/30	南共留苏党员抗议铁托政策
10	1948/09/07	芬共代表大会开幕 各国兄弟党均向大会致贺
11	1948/09/12	芬共代表大会闭幕 通过修改党章选出新执委会
12	1948/10/10	共产党的思想武器 情报局机关报“争取持久和平与人民民主”第十一期社论
13	1948/10/16	南斯拉夫铁托集团的民族主义往何处去 联共党(布)中央委员会 载于一九四八年九月八日“真理报”
14	1948/11/12	奥共举行十四届大会选出新的中央委员会
15	1948/12/02	希共建党三十周年各兄弟党致电祝贺
16	1948/12/02	阿共首次代表大会尖锐谴责铁托集团
17	1948/12/21	波两工人政党合并定名为统一工人党 贝鲁特号召为社会主义奋斗
18	1948/12/24	向社会主义迈进 保共代表大会开幕 各兄弟党均派有代表参加
19	1949/02/03	联共中央 电贺德统一社会党代表会议

年号	件数
1946	0
1947	4
1948	14
1949	13
1950	9
1951	16
1952	12
1953	14
1954	25
1955	8
1956	85
1957	79
1958	98
1959	141
合計	518

20	1949/03/12	奥共主席谈话 和平拥护者始终团结斗争 就不会有第三次世界战争
21	1949/05/27	捷共九届代表会开幕 各兄弟党均派代表参加
22	1949/05/31	巴黎外长会议开会五次 苏联建议获得全德支持
23	1949/06/06	外长会上苏联痛斥分裂阴谋 德国人民要求统一运动高涨 捷共九届代表会胜利闭幕
24	1949/08/05	南斯拉夫的托洛茨基分子是帝国主义的突击队 (续完)
25	1949/09/10	瓦尔加的自我批评
26	1949/09/26	英共助理书记马修斯 函谢毛主席对波立特的祝贺
27	1949/09/28	全世界目光集中到北京 向民主的新中国致敬礼 比共中央、英共伦敦区委、捷议会副主席、捷中协会分别电贺中国政协
28	1949/10/22	托尔布金元帅的哀荣 劳动人民纷赴灵前致最后敬礼华西列夫斯基元帅等亲为守灵
29	1949/10/22	谈谈美国进步党
30	1949/12/24	无限热爱与忠诚 献给伟大斯大林 塔斯社报道莫斯科庆祝斯大林同志七十寿辰大会
31	1949/12/25	克里姆林宫历史性的一日 苏政府举行盛大招待会 强大的鼓掌声浪欢迎斯大林同志莅会什维尔尼克邀毛主席等到主席台就座
32	1950/01/29	十二月的莫斯科
33	1950/02/27	动员人民击败美英战争威胁 挪共开特别代表大会 ...
34	1950/02/27	荷共大会揭幕 反动当局竟拒绝各国党代表入境 哥 ...
35	1950/05/23	乌拉圭共产党举行代表大会 宣读联共中央及各国兄 ...
36	1950/06/14	编辑文件性著作要认真
37	1950/07/07	德国统一社会党中央发表声明 响应西欧七国共产党 ...
38	1950/07/27	庆祝德国统一社会党代表大会 柏林举行盛大群众集 ...
39	1950/11/06	扩大并赢得争取和平的斗争 一九五〇年九月二十九 ...
40	1950/11/28	民革二中全会开幕 中心议题为抗美援朝保家卫国并 ...

※サンプルの抽出については、愛知学院大学大学院生、南谷真氏の協力を得た。

1950年代の中国外交再考 —革命支援・平和共存・ハンガリー事件

石井 明

I 朝鮮戦争評価の変遷

1950年、建国したばかりの中国は国際的な試練にさらされます。朝鮮戦争が勃発し、中国は人民志願軍を朝鮮半島に派遣します。私の記憶では、日本のメディアは「朝鮮動乱」と呼んでおりました。朝鮮戦争という言い方は後からの言い方だと思います。

私はこのところ、建国後、中国軍が近隣諸国と戦って戦死した者を祭っている烈士陵園を訪ねてまわっています。ソ連軍と戦った珍宝島事件の戦死者の墓地や、ベトナム軍と戦った中越戦争の戦死者の墓地、南ベトナム海軍と戦った西沙の戦いの戦死者の墓地をこれまで訪ねてきました。

その一環として、今年（2010年）2月 潘陽の抗美援朝烈士陵園を参観しました。中国軍の戦死者は18万に達する、といわれ、基本的に朝鮮半島に埋葬されているのですが、幹部クラス（連隊級以上）の戦死者と戦闘英雄に認定された戦死者は後になって、遺骨を掘り起こして、中国領内に運び、潘陽に抗美援朝烈士陵園を作つて、そこに葬ったのです。

邱少雲という戦闘英雄がいます。邱少雲の属する小隊は、敵から60メートルしか離れていない山裾に潜伏し、翌晩の大部隊の進攻に呼応するよう命令を受けます。しかし、図らずも敵の砲火によって燃え上がった火が、邱少雲の体に燃え移ります。体を動かせば、潜伏していることが敵に察知されてしまいます。邱少雲は少しも体を動かさず、壮烈な最期をとげます。

中国の教科書に載っていて、中国人なら誰でも知っている、この人物の墓が、軍幹部の墓と並んで、最前列にありました。園内に抗美援朝烈士記念碑があって、そこには次のような文言が刻まれていました。

「1950年6月、アメリカは我が國の領土台湾を占領すると同時に、15カ国の軍隊をかき集めて、国連の旗を掲げて朝鮮民主主義人民共和国に侵略戦争を始めた。

マルクス・レーニン主義、毛沢東思想で武装した中国人民志願軍は抗米援朝闘争において崇高なプロレタリア国際主義、革命英雄主義精神を表した。

1962年10月25日 建立 」

毛沢東時代はこのような朝鮮戦争評価が一般的だったのですが、今では、朝鮮戦争評価